

秘境の沢旅

(一ノ沢～片貝沢～ミノコクリ沢～大滝沢)

斎藤 憲一

■山行年月日:2019年9月25～27日

■メンバー:斎藤憲一

■コースタイム

25日 大津岐発電所 7:00～倉ドノ沢 7:30～稜線 11:30～コオリ沢下降～片貝沢出合 14:00～大中小沢出合(BP) 15:00

26日 BP7:30～駄尾沢出合 8:30～ジイ沢乗越沢出合 9:30～稜線 12:00～12:30～下ノ沢下降～ミノコクリ沢出合 14:00～金山沢出合(BP) 15:00

27日 BP7:30～金山沢上部二俣 8:40～稜線 11:00～シロウ沢下降～下ノシロウ沢出合 13:30～14:00～滝ノ沢取水ダム 14:30～大津岐発電所 15:30

これまでこの山域では『柳沢～貝ノ岳スラブ』『ジイ沢～片貝沢上部～ツマジロウ沢』と探ってきたが、いつかは片貝沢からミノコクリ沢を繋いでみたいという思いを持っていた、私的な思い入れの秘境の沢旅である。

当初計画の連休は、台風の襲来によって中止となってしまった。しかし、ど

うしても今年中に行きたくて、晴天が予想される平日の3日間に単独で行くこととしたが、現地までのアプローチに時間が掛かるため、前夜発とした。

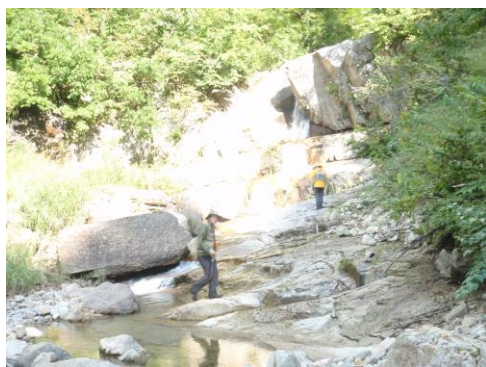
25日

大津岐発電所のゲートをすり抜けると、発電所敷地内にイベントテントが張ってあり職員らしき人がいたので『すみません、通らせてもらいます』と挨拶をして一ノ沢林道をアプローチする。林道から適当なところを下って倉ドノ沢出合で身支度を整える。いよいよ思い入れの秘境の沢旅の始まりである。単独だからと気負わずに、楽しんで行こう!! あまり変化のない中であっても、いくつか出てくる小滝を慎重に越えながら進ん



一ノ沢中流部 5m滝

で行くと二俣となり右俣を進む。この辺りからは、基本はナメであるが、大小の滝がいくつも出てくるため、できるだけ直登しながらも、困難なものは小巻にしながらやり登って行くと、次第に流れは藪に覆われてくる。そして藪漕ぎをしばしで今回最初の尾根越えとなる。ここからは片貝沢を目指して、藪を伝いながらコオリ沢を下降していく。水流が現れてくるとナメ状となるが、1,100mから1,000m辺りは地形図で滝がありそうだと想像していたが、やはりそれは現れた。まずは25mだが、大きく巻くのも面倒なので、右岸の立木で15m懸垂し、あとは藪を伝って下降する。更に下ると今度は20m滝であるが、右岸の壁に絡まっている木の根を伝ってルンゼから沢床へ達する。その後もいくつかの滝を下っていくと、左手前方に白石沢の真っ白なスラブが見えてくる。この辺りからはきれいなナメ床となり、ルンルン気分で下っていくと、やはり素晴らしいナメ床の片貝沢に出会う。するとそこには二人の釣り師が釣り糸を垂れていた。すぐに二人が振り返り、突然現れた私を見て驚いているが、私も驚いた。平日のこんな所で人に出会うとは思ってもいなか



片貝沢で二人の釣り師と出会う

ったからだ。挨拶をすると彼等は私に興味を持ったようで、「どこから来たんですか?」「どこへ行くんですか?」と矢継ぎ早に根掘り葉掘りと色々なことを聞いてくる。彼等は奥只見ダムからボートで片貝沢に来たようで、この先の滝までで戻るとのことなので、先に立たずに後ろをついて行く。そして現れた3段8m滝下で分かれてさっさとこの滝に登り、先に進むと、間もなく大中小沢が出合い、すぐ上流には流木も砂地もある広い河原が出てきたことから、ここを一夜の宿とする。テントを設営して流木を集め、すぐ上流の釜に釣り糸を垂らしておかずを確保し、何とも幸せなゆったりとした一夜を過ごした。

26日



片貝沢中流部のハート形の釜

のんびり出発し、ナメ床を進んでいくと間もなく現れる10m滝を小巻にする。更にナメ床は続き、写真で見たハート型の小釜に癒やされ、近寄っても逃げないイワナにも癒やされながら歩みを進めると、ジイ沢から下降した沢の出合いに、昨年付けた赤テープが残っていた。ここまでずっとナメ床が続いていた沢も、ここら辺りからは随分近くに木々が

迫ってきて、1,200m付近の二俣からは藪が覆ってくる。昨年は右へ取った最上部の二俣を、今日は左へ行き、更に急な藪漕ぎをして今回 2 回目の尾根越えとなる。

下降して行く下ノ沢も初めは急傾斜であるが、白沢岳からの沢を右から合わせる頃からは幾分傾斜は緩んできて、1:1の二俣からは沢床も美しいナメ状となる。そして驚いたことに、いくつも現れる小滝の釜には必ず複数のイワナが泳いでいて、それはミノコクリ沢まで続いていた。

出合ったミノコクリの本流はさすがに今までの沢とは違い、流れが太く強いが、それでも金山沢までは苦勞することもなく、順調に達することができた。この本流右岸は広い草と石のかなり広い河原となっていて、丁度いい時間なので天場とする。一つ残念なのは流木が無いということで、焚き火はお預けとなり、釣ったイワナは刺身でおいしくいただいた。こんなに深山の今夜の宿の空にも満点の星が輝いているが、今年はここを訪れた人間はいるのだろうか？そんな地にいる今の自分が自然に溶け込み、ここに存在していることに心が満たされていることを実感しながら夜は更けていく。

27日

金山沢の出合いは、葦の広い河原となっていてなんとなく藪っぽいのだが、進んでも進んでもそれは変わらずに、下流・中流・上流ともに滝らしい滝も現れず、トロや釜もほとんど無く、すっきりした沢ではない。そんな長く変化のない

沢を岐路のアプローチにとって、今回最後となる3度目の尾根越えをする。

ここから下降して行くシロウ沢も全く変化のない沢で、ドンドン下れるのだが、いかんせん石が滑り、足を置く場所によほど注意していかないと滑って転んでしまう。実際、何度バランスを崩して、何度転んだことか。こんな状況がどこまで続いていくのかと思いながら下っていくと、歩くのがいやになる頃に、ようやくスクノシロウ沢の出合いに達することができた。この沢も結構長く全体にぬめっていたことから、随分時間が掛かってしまった。ここまで大事に取っておいたカップラーメンをすすりながらゆっくり休憩し、しばしここまで三日間の秘境の沢旅を振り返る。

残るは僅か。あとはルンルンで歩けるのかと思いきや、シロウ沢同様に、足を置く石がことごとく滑りまくり、ようやくの思いで堰堤の河原に出たときには、本当に安堵した。この堰堤からは林道が延びていて、安心して帰路につくことができた。

今回の沢旅には、自分なりにいくつかのこだわりがあった。一つは自分にとって未知の山域を探ること。二つに秘境と思われる片貝沢を下から詰めること。三つにミノコクリ沢に身を置くことであり、これらを一度にやってみようということであったのだが、倉ドノ沢とコオリ沢は沢登りとしてもまずまず楽しめたのだが、片貝沢は思ったよりボートで入溪する釣り人が多いようであり、秘境とは言いがたいと言っているだろう。一方、ミノコクリ沢には人臭さが感じられ

ず、あるがままに流れる水には無垢なイワナが悠々と泳いでいる。これこそが秘境ではないかと思わせてくれる流域であろう。

今回は随分欲張りな沢旅を計画してしまったが、次回は気心の知れたパートナーと共に、もう少し余裕を持った計画で、この流域を探ってみたいものである。

